

管領の父：細川頼春の生涯

【班員】喜多、岩田、石川、高橋、松浦、斎田、山本、松嶋、守本、檜原

1 はじめに

今回地域学習を行うにあたって、大麻町の萩原に「細川頼春」のお墓があることを初めて知った。お墓は大麻中学校から自転車で10分ほどの場所にあった。こんな近くに室町時代に活躍した人物のお墓があることにびっくりした。そこで私たちは、「細川頼春ってどんな人物なんだろう？」「なぜ大麻町にお墓があるのだろうか？」と疑問に思い、今回調べてみることにした。

2 細川頼春について

幼名は源九郎という。三河国細川郷（現在の愛知県岡崎市細川町）出身である。名字の細川は出身の地名からとった。

頼春が歴史の表舞台に登場するのは、後醍醐天皇の討幕運動に足利氏が加わったことから始まる。細川氏は足利氏と同じ一族だったので、兄の和氏と共に参戦し、1333年に六波羅探題を攻め落とし、鎌倉幕府を滅ぼす。後醍醐天皇による新しい政治体制である「建武の新政」が開始されると、足利尊氏の命令で、頼春は尊氏の嫡男である当時4歳の千寿王（後の2代将軍・足利義詮）の補佐役に任命される。

ところが、建武の新政に不満をもった足利尊氏は後醍醐天皇のそばから離れ、二人は対立をしてしまう。その時、頼春は足利尊氏側につく。後醍醐天皇側との戦いに敗れた足利尊氏は、いったん九州へ逃げていくが、この時頼春は兄の和氏や従兄弟たちと共に、四国地方の武士たちを平定し、巻き返しの準備を行うことを尊氏に命じられる。1336年の湊川の戦いでは、九州から京都へ向かう尊氏軍と合流して、新田義貞・楠木正成と戦い勝利する。そして、足利政権樹立に貢献した。その後、南北朝時代が始まる。その中で頼春は、鎌倉時代に阿波国の守護であった小笠原氏を支配下に組み込み、後醍醐天皇が治める南朝を倒すために、数々の戦いで活躍した。

しかし、足利尊氏が嫡男の義詮を京都に残し東海道での南朝との戦いに京都を出たすきに、楠木正儀（楠木正成の息子）と北畠顕能（北畠親房の息子）ら南朝側の武将が攻めてくる。そこで頼春は、義詮を守るために必死で戦い、その結果無事に義詮を近江の地に逃すことができたが、自分は京都の七条大宮付近で戦死する。

享年は49歳、もしくは54歳といわれている。

ちなみにこれは余談だが、頼春は1334年に宮中で行われた射礼で、優れた成績を残して後醍醐天皇にご褒美をもらったそうだ。

※文献を調べたが、残念ながら細川頼春の似絵をみつけることはできなかった。

3 細川頼之について

細川頼之は、1329年に細川頼春の長男として生まれた。幼名は弥九郎と言う。父の細川頼春が南朝との戦いで戦死すると阿波守護を引き継ぐ。そして、父の弔い合戦である男山合戦で、南朝方に奪われていた父の亡きがらをとりもどした。1366年（37歳の時）には、細川家としては初めての管領の職につく。2代目将軍の足利義詮が亡くなる時3代目将軍になる義満（当時11歳）に、「頼之を父と思え」という言葉を残す。それだけ細川氏は足利氏に信頼されていたということだ。義詮は、命をかけて自分を守ってくれた頼春の息子ということで、信頼していたのかもしれないと思った。



それから1379年まで、細川頼之は13年間管領を務めた。管領から退いた後は、四国に戻ったが、1392年には再び幕政に関わるようになる。しかしその年に彼は病死する。享年63歳だった。

4 細川頼之のお墓について

頼春の首は、子の頼之が南朝との戦いに勝ち、奪い返した。そして、頼春の兄の和氏と同じく秋月城の周辺に葬られた。しかし、頼之が居城を勝瑞城に移す時に頼春のお墓も一緒に移した。

僕たちは、実際にそのお墓を訪れた。外国の方向けの英語の看板もあった。僕たちは石段を登り、お墓の前で室町時代に思いをはせながら手を合わせた。



しかし、鳴門市の文化交流推進課からお話に来てくださった藤川さんから衝撃の事実を知らされる。「このお墓は、細川頼春のお墓ではない。」と。つまりこのお墓は、細川頼之がつくったものではなく、ここに細川頼春の首は葬られていないということだ。

<その理由1：お墓の形が違う。>

室町時代の武家のお墓は、右の資料に示したような「宝きょう印塔」といっていくつかの石を積み上げる形だったそうだ。なので、そのままの形で残るのは難しいそうだ。

右下の「神道型墓石」の形は、明治時代以降に作られたお墓になる。現在、頼春のお墓とされているものは明らかに「神道型墓石」の形をしているため、明治以降に作られたものということになる。





<その理由 2 : お墓に刻まれた文字がおかしい。>

お墓には「光勝院殿前讃州太守裕繁賓測大居留士 神儀」と書かれている。この中の「大居留士」という使い方は真言宗に見られる表現だそうだ。細川氏は臨済宗なのでこれはおかしい。

それなら本当のお墓はどこにあるのだろうか。

(候補 1 : 阿波市秋月城にそのまま残っている。)

阿波市土成町秋月に頼春の兄である和氏のお墓があるそうだ。そのすぐそばに宝ぎょう印塔が祀られており、誰のお墓かどうかはわかっていないということで、もしかして萩原に移転されたと思われていたが、実はそのまま残されていたのかもしれないということも考えられる。

(候補 2 : 光勝院の境内の一角にある五輪の塔らしきものでは?)

1 m 4 0 cmほどあるもので、建てられた時期も南北朝時代のものと考えられているそうだ。ただ、石は原型ではなく、後世にくずれていたものを誰かが積み上げた可能性がある。



頼春のお墓がこの2つのどちらのものなのか、もしくはどちらでもないのか、解明される日がくることが待ち遠しい。

5 光勝院について

臨済宗妙心寺派の光勝院は正式名称を南明山光勝院という。かなり広い範囲を収めるお寺だったそうだ。

もともとは、阿波国守護所があった秋月荘に建てられていたが、1364年、細川頼之が四条大宮で戦死した父細川頼春の13回忌に、この萩原の地に移転してきた。

ここは細川一族の位牌を納めてある菩提寺であり、足利幕府の支援を受けていた官寺でもある。大きな寺内町として栄えたこの光勝院周辺の土の中には、今も歴史上重要な文化財がたくさん眠っている可能性が高いそうだ。



6 調べ学習をしての感想

- 調べ学習に取り組むまでは「細川頼春」の名前すら知らなかったのに、調べたことで室町時代にもくわしくなり、社会の授業に役立った。
- 自分たちの住む大麻町が、歴史的人物とかかわっていたことがすごいと思った。こんな身近な所に歴史的な遺産があることに改めてびっくりしたし、大麻町ってやっぱり文化と歴史の町なだあーと思った。
- 時代によってお墓の形が違うことを知って、お墓の形に興味をもった。
- 「細川頼春」のお墓と言われているところの下には、頼春の遺骨はないと知り残念だったが、本物はどこにあるのだろうかに興味をもった。
- 細川氏と足利氏のつながりが見えてきた。なぜ細川頼之が「管領」となって活躍したのか、そのはじまりがよくわかった。そこには父の頼春の活躍によって築かれた足利氏との信頼関係があったことを知ることができておもしろかった。
- 歴史的な価値がある物でも、時代が変わっていく中で失われていくものがあることを知って、とても悲しくなった。その価値がわからないと、知らないうちに壊されていく。大麻町にはまだまだたくさん歴史的遺跡が残っているのではないだろうか。そういったことを気にすることができる自分になりたい。
- 自分は頼春の亡きがらは、光勝院の近くに眠っていると思う。息子の頼之は、これからの細川家の活躍を、勝瑞城がみおろせるこの場所でずっと見守ってほしくて、この場所を選んだと思うからだ。
- 本当のことをさぐっていくのはおもしろいと思った。

7 おわりに

細川頼春の本当のお墓はここにはないかもしれないが、息子頼之が勝瑞城の近くに父の菩提をうつそうとした思い、後世の人が記念の碑を建てた思いは、僕たちがしっかりと受けとめたいと思った。今回の調べ学習を通して細川頼春と出会えた。これからも遺跡を通して、いろいろな人と出会っていききたい。



光勝院の入り口にある案内碑



光勝院のある坂の上から見下ろした風景。
(頼春は細川家が活躍する勝瑞城をどんな思いで見守っていたのだろうか。)